

希望

この手に

沖縄の貧困・子どものいま

自分を否定するよさな言動が気になった。「どうせ、俺なんか」。中学3年生の男子生徒。当時、糸満市内にあったエンカレッジ糸満校内で、姿勢を傾けてうつろな目をして座っていた。糸満校は市の委託で2014年度まで



仲間と種に手を握りを見守ったエンカレッジ糸満校の生徒たち(3部)

県外から引き揚げ

第3部 ⑨

運営していた「無料塾」で、生活困窮世帯の子どもたちを受け入れていた。男子生徒は市や学校の紹介で、糸満校に つながった。13年5月、40代女性の塾長は、男子生徒と初めて会った日の様子を覚えて いる。

男子生徒は同じ年の春、母親の失業に伴い、県外から兄と共に糸満市に移り住んだ。

長の誘いでボートに乗せてもらい無人島へ。糸満校は「全員一軍、二軍はいない」をモットーに、体験を積極的に取り入れた授業を展開。生徒たちはマクゴの解体を通して漁場や県内漁獲量を学び、包丁の研ぎ方、調理法を体感した。たこを手作りして揚げる体験を通じ、角度や「三平方の定理」を学んだ。

があった。「よし、学校へ行こう」。男子生徒はそれ以降、中学校に通うようになり高校進学を果たした。男子生徒の変化に影響を受けた、兄は塾長の働き掛けで講師として無料塾で下級生を教えることになった。自身も学び直し、翌年高校を受験、再入学を果たした。

糸満校には、思いがけない資)できる大人を目指す。投資という気持ちで商品を送っているが、子どもたちに伝えて」とつづられていた。社会で活躍する企業人の応援は、男子生徒と兄にとって大きな励みになった。

無料塾通い進学、母は就労

出会い契機に夢描く

学校になじめず不登校になっていた。「夢や目標なんてない。死んでもいい」。気持ちも沈みがちで、自暴自棄になりかけていた。「本心に素直に思っ て笑える」を一緒にやるよ」と。塾長の語り掛ける言葉に男子生徒は、背中を押されるように塾に通い始めた。

塾ではわくわくする体験の連続だった。平日の朝、起きられず家で寝ていた日は、塾

「楽しい」。型破りな授業に男子生徒は引き込まれ仲間もでき、続けて通えるようになった。それでも高校受験は遠い世界の話だった。道の途上でとまっている男子生徒に塾長が言った。「夢が今見つからなくても、高校に進学して大学に行くこと、本だけじゃなくて何通りもの道が選べるんだよ」。男子生徒の心にすどんと落ちるもの

贈り物があった。米国のスポーツアパレルブランド「アンダーアーマー」を日本で展開する「株式会社ドーム」の安田秀一社長からシューズが届いた。トラック2台分、500足のシューズに子どもたちは歓声を上げた。安田社長は塾長の知人で、手紙には「シューズがきっかけとなり、スポーツで成功する生徒がでる。将来、自分も寄贈(投

母親にも転機が訪れた。内科系疾患を患っていたが回復に向かい、就職に臨めるようになった。ハローワークの相談員の勧めでヘルパーの資格を取り、福祉関係の職を得た。生活が軌道に乗ってきた。

男子生徒と兄は現在、高校3年生。2人とも「大学に進学して教師になりたい」と夢を口にする。高校で農業を学ぶ男子生徒は「農業技術をしつかり学び、将来は沖縄で農業を軸にした塾を開きたい」と真つすくな瞳で前を見詰めた。(子どもたちの貧困取材班)

◇ ◆ シンボジウム「希望この手に」で、沖縄の貧困・子どものいま」が、20日午後6時半から那覇市のパレット市民劇場で開催される。入場無料だが整理券が必要。問い合わせは社会部まで。